

宮塚遺跡 A 地区

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583) 83-1123
平成12年3月1日



宮塚遺跡A地区 全景

宮塚遺跡を真上から眺めてみると、溝が調査範囲をかこむように、ぐるりと円をえがいている様子が分かります。これらの溝は、発掘調査時で深さ約50cm、幅約1mを測りましたが、近年の土地改良事業によって遺跡の大部分が深さ50cm以上も削平されていることを考えると、本来はより深く幅が広い溝であったのでしょうか。

人々は一体何のためにこのような溝をめぐらせたのでしょうか。溝の中からは、弥生時代に使わ

れていた土器や石器が多数出土しています。こうした溝の性格のひとつとして考えられるのは、ムラの周りにめぐらされた“環濠”です。

平成5年から6年にかけて実施された発掘調査によって、この地が、旧石器時代から近世にいたるまで、幾度となく生活の場所として利用されていることが分かりました。中でも環濠の発見などの成果は、市内はもとより、東海地方における弥生時代の研究に大きな資料をもたらしました。

●宮塚ムラの景観



宮塚遺跡A地区 遠景(南より)

宮塚遺跡の北には、岐阜市との境をなす北山がそびえており、遺跡は北山から派生した、周囲よりも比較的標高の高い微高地上に所在しています。

遺跡の背後には、市指定文化財である「伝・蘇我倉山田石川麻呂墓」が所在する小山があり、当時はこの山を頂点とした、周囲よりもやや高い土地であったと考えられます。そして遺跡の西には、岐阜市岩滝から南に流れる間無下川が、遺跡の南には、各務原台地の北辺に沿って流れる境川があり、遺跡は両河川に挟まれる形で立地しています。

弥生時代に大陸から伝わったコメづくりは、それまでの縄文時代と、ムラの立地も大きく変えて

いきました。狩猟・採取を基本としていた縄文時代のムラは、山や台地上に立地しています。一方、農耕を食料獲得の主体とする弥生時代は、水に恵まれた低地に水田を作り、その管理のために、低地に隣接した微高地に住居をかまえます。各務原市の弥生時代の遺跡分布を見ても、その多くは比較的水を得やすい低地に立地しています。

宮塚遺跡は、間無下川と境川に挟まれる形で立地しているために、遺跡周囲には両河川によって作られた沖積地ちゅうせきちが広がっています。微高地の周囲に水田経営が可能な低湿地が広がる宮塚遺跡の周辺は、弥生ムラの典型的な姿を表しています。



宮塚遺跡 周辺地図

●弥生文化の到来



遠賀川系土器



条痕文系土器

宮塚遺跡からは、弥生時代のなかでも、前期から中期にかけての土器が主に出土しています。この時期の東海地方は、縄文文化から弥生文化への激しい変動期を迎えていました。

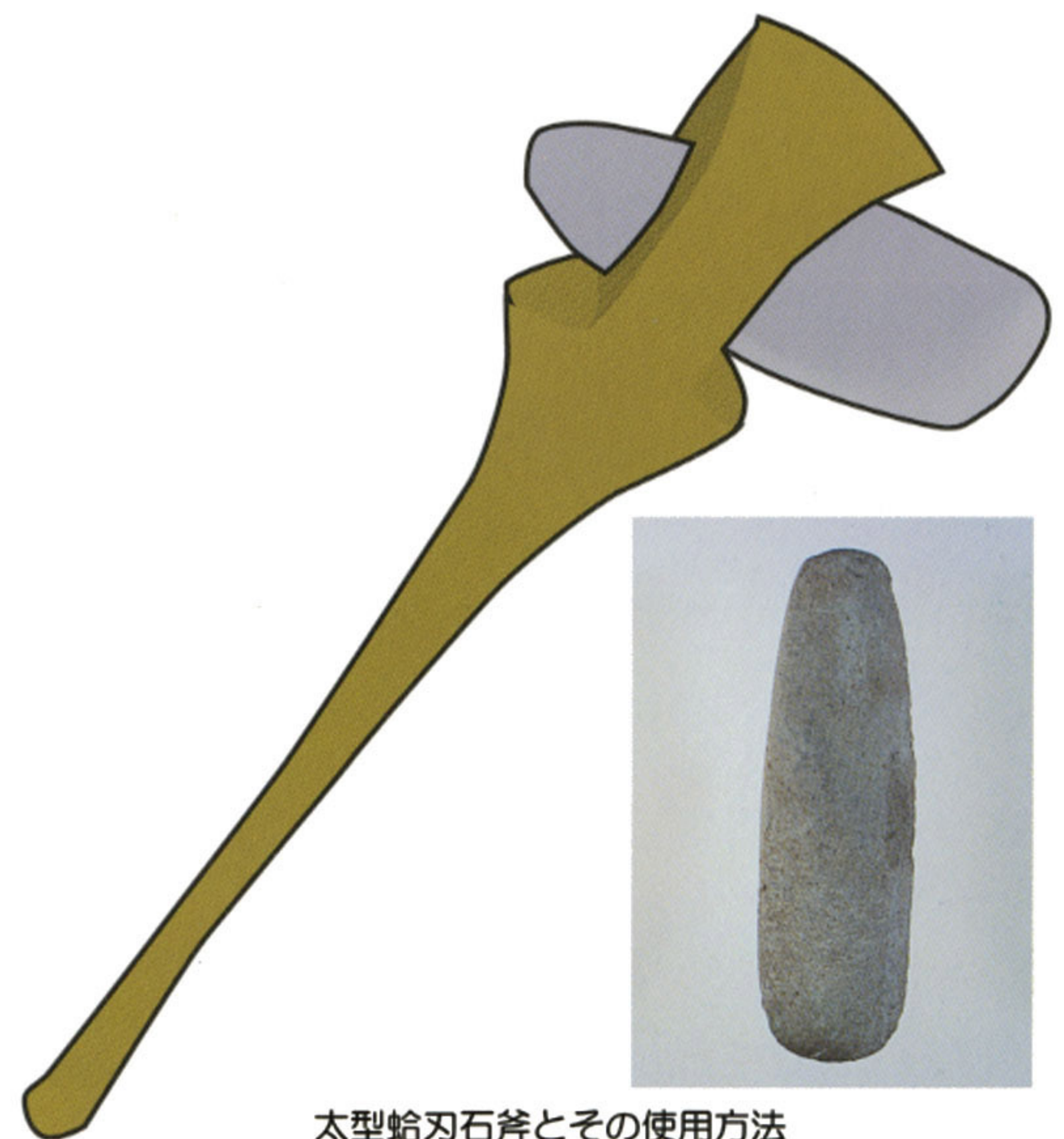
北部九州からの弥生文化の波は、弥生時代前期の短期間に一挙に伊勢湾にまで達します。弥生時代前期の北部九州を代表する、遠賀川式土器おんががわしきどきの系統に連なる土器が、西日本各地から出土している

ことからその勢いがうかがえます。

宮塚遺跡からも、“遠賀川系土器”おんががわしきどきが出土しています。その中でも口縁部と肩部に段をもつ壺は、美濃地方においてもっとも古い部類に入る土器です。

また、樹木を伐採する石斧である太型蛤刃石斧ふとがたはまくりばせきふや、伐採した木を加工するための手斧である扁平片刃石斧へんぺいかたばせきふなどの、大陸系磨製石斧たいりくけいませいせきふと呼ばれる石器も見つかっています。

これらの出土品から、宮塚遺跡は、美濃地方において、いち早く弥生文化が到来した遺跡であると考えられます。

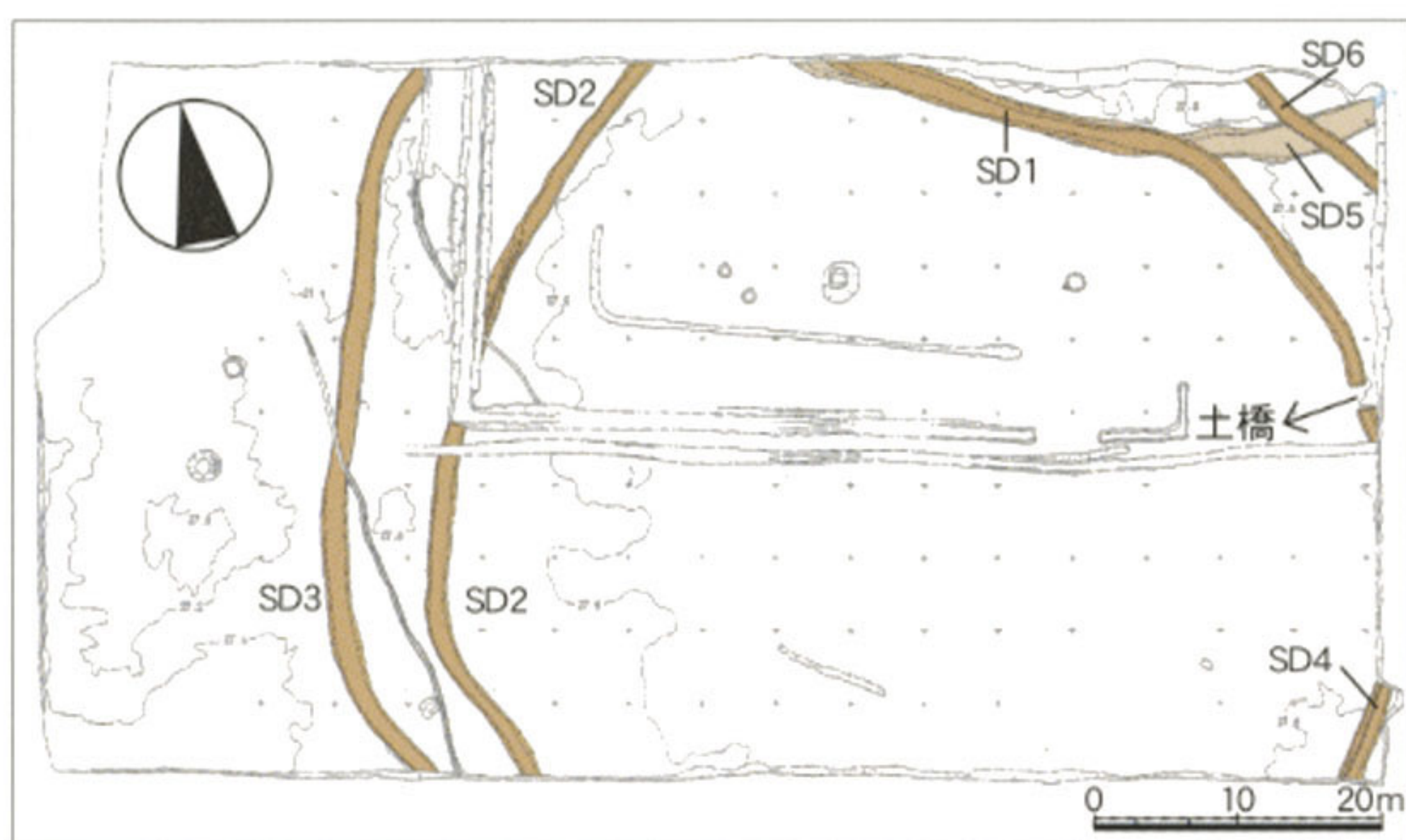


太型蛤刃石斧とその使用方法

一方で、宮塚遺跡からは縄文文化の伝統を色濃く残す“条痕文系土器”^{じょうこんもんけい ど き}も出土しています。貝殻や植物の茎を使って、表面を粗く搔き削った形は、縄文土器を思わせ、遠賀川系土器と大きく趣きが異なります。

西日本に瞬く間に広がった大陸からの新しい文化も、豊かな照葉樹林^{しょうようじゅりん}に育まれた東日本にはすぐさま受け入れられたわけではありません。宮塚遺跡に見られる遠賀川系土器と条痕文系土器は、弥生文化の伝播を考える上での貴重な資料です。

●ムラ同志の抗争 周囲に濠をめぐらせた集落(環濠集落)



溝状遺構分布図

宮塚遺跡からは合計6本の弥生時代の溝(SD1～SD6)が検出されましたが、これらは時期によって、さらに2つに分類できます。

SD5は弥生時代前期の溝です。調査区域北東部で、その一部しか確認できませんでしたが、出土土器から、東海地方でも最も古い時期の部類にはいる環濠の一部と考えられます。

SD1～SD4とSD6は弥生時代中期の溝です。この5本の溝は、同心円状にめぐる二重の環濠の一部となります。SD1・SD2・SD4が内側の環濠、SD3・SD6の2本が外側の環濠と推測されます。限られた範囲での調査ながら、中期の環濠はその全形をつかむことができ、直径約60mというその大きさが明らかになりました。

環濠の内側には、住居が建てられ、集落が形成されていました。しかし残念ながら宮塚遺跡では、後の土地改良によって弥生時代の地面は削り取られており、住居跡は確認されませんでした。

SD1の東端部では、幅約1.5mにわたって、溝を埋め戻した跡も見つかっています。単に埋め戻されただけでなく、叩き絞められた状況から見て、集落の出入口として機能していた、溝を渡る土橋^{どばし}の可能性も指摘されています。



土橋

環濠は、単に“集落”という生活の場を周囲から区画するだけでなく、防御施設としても機能していたと考えられています。愛知県清洲町の朝日遺跡^{あさひ いせき}では、環濠内に、先の尖った木を上向きに並べた逆茂木^{さかもぎ}が見つかり、進入を阻む防御機能としての環濠の性格をうかがわせます。

コメづくりにおいて重要な要素となる水は、時に水をめぐる争いも引き起こします。ムラ同志の争いにおいて、環濠は重要な守りの施設となりました。弥生時代の紛争は、石鏃^{せきぞく}と呼ばれる石の矢じりからもうかがうことができます。宮塚遺跡からは、長く細身の石鏃が見つかっており、狩猟具としてだけでなく、対人用の武器としても使用されていたと考えられます。宮塚ムラの人々も、争いとは無縁でなかったのかもしれませんが。



飛行機鏃



弥生時代中期の宮塚ムラ 想像図

●発掘調査を終えて

宮塚遺跡では、弥生時代の暮らしとともに、縄文時代から弥生時代へと移り変わる変動の時期をうかがう資料が見つかり、各務原市のみならず、美濃地方においても重要な調査成果となりました。

弥生時代も終わりに近づくと、このような環濠集落は姿を消します。個々のムラを越えた、より大きな地域を単位とした体制が確立し、ムラ単位で防御機能を備える必要がなくなったのでしょうか。宮塚遺跡の東には有力者の墓である弥生時代後期の墳丘墓ふんきゅうぼ かさみやまいちごうふん(加佐美山1号墳)が見つかり、蘇原地区に大きなまとまりが存在していたことを示しています。

さらに、宮塚遺跡からは旧石器時代や近世の人々の生活の営みも見つかっています。

ナイフ形石器と呼ばれる石器は、石を打ち欠いて作られた、槍や小刀として用いられた旧石器時代の遺物です。また調査区域中央では、方形の溝と、井戸などが見つかり、中世に屋敷地として利用されていたことも分かりました。

今回の発掘調査によって得られた成果は、今後、各務原市の歴史を復元するに当たって、積極的に活かしていきたいと思えます。



ナイフ形石器



井戸遺構